

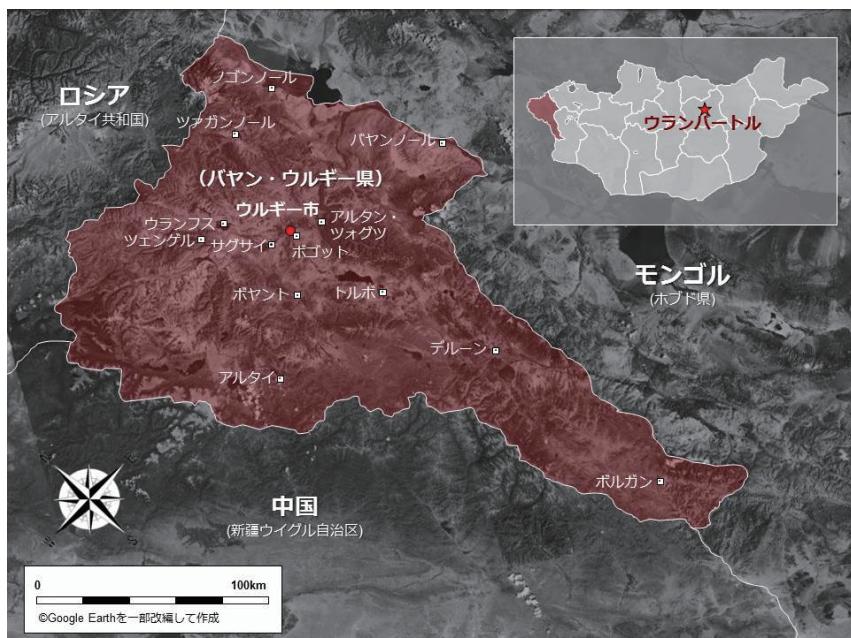
公益財団法人国土地理協会 第16回学術研究助成

アルタイ山脈の古カザフ語地名と  
土地利用観の民族地理学

研究代表者  
**相馬 拓也** 早稲田大学高等研究所

## 1. はじめに

本研究は、忘却されつつあるアルタイ山脈北部の古カザフ語地名を記録し、その伝統的な土地利用観の在来知を実証的に解明する民族地理学研究である。アルタイ山脈には1820年代頃から中国（現在の新疆ウイグル自治区）からカザフ人が流入し、モンゴル人とは異なる文化と言語を持つカザフ・イスラームコミュニティが形成され始めた。とくにアルタイ北部地域、現在のバヤン・ウルギー県（地図I）は、モンゴル国内にありながら人口の98.5%を少数民族カザフ人が占める。同地はイスラーム社会であり、言語もカザフ語が日常的に用いられる。モンゴル人とは異質の社会空間が独自に成立発展している（図1a～i）。



地図I バヤン・ウルギー県の地図

現地カザフ遊牧民には、牧畜生活の文脈にもとづく宿營地、放牧地、狩場、水源、資源採集地（天然塩、ソーダなど）の土地利用上の空間共有知が、カザフ語の固有地名とともに継承された。しかし近年のモンゴル政府による統治強化の傾向もあり、伝統的な現地カザフ語地名は行政上・国土地理上は認められていない。またその地名の一部も、社会主義時代を通じてモンゴル語地名へと改名されてきた可能性がある。また、2015年末までカザフ語名称だった

©GoogleEarth上の村名（郡名）表記が、郡中心部（ソムセンター）のみを示すモンゴル語名称へと置き換えられている。そのため、県内13郡の正式な行政名称も参照できなくなっている。加えてモンゴル人とカザフ人社会の間隙に横たわる緊張関係もあり、当該テーマはモンゴル国内で要請度が感じられにくい未開拓分野となっている。同県地方部の生活では、地名はすべて在来地名が用いられ、その多くは地図化されていない。そのため、現地カザフ語固有地名の記録と土地利用観の解明は、伝統文化保護の観点からも緊急性を要している。

以上の背景を踏まえ、本研究は以下3つの課題（T<sub>1</sub>～T<sub>3</sub>）で上記の社会的要請に応答を試みる。

- T<sub>1</sub>. サグサイ村を中心に、同村域内の宿營地・資源利用地の伝統的なカザフ語名称を記録する。
- T<sub>2</sub>. 上記（T<sub>1</sub>）地名の示す①空間的広がり、②土地利用上の区分、③語源・由来、④地形・植生など生活環境の特性、を現地生活者へのインタビューで特定する。
- T<sub>3</sub>. 上記（T<sub>1</sub>～T<sub>2</sub>）の情報を集約してデジタル地図を製作（GIS分析）する。

本研究は「民族地理学」を従来の民族分布の地理学研究としてではなく、個別の民族・社会集団による、在来地名・土地利用観・地理空間認識などの在来知／伝統知の研究も包括して再定義している。そのため、在来地名研究の横断的かつ学際的可能性についても、あわせて示す意図がある。



a カザフ遊牧民の天幕



b ヤギの搾乳風景



c アルタイ奥地ホトン湖の景勝



d 冬季に暮らす家屋



e 女性による伝統工芸製作の習慣が残る



f 地方にある小さなモスク



g 伝統的なカザフ装束の老夫婦



h イヌワシをてなずける騎馬鷹狩



i 鷹狩ではキツネをおもに捕獲する

図1 アルタイ系カザフ人の暮らし

## 2. 対象と調査方法

### 2.1. 調査方法と項目

本研究は、申請者のカザフ遊牧民の社会・生態調査の過程から着想を得た。地元遊牧民は部外者には理解しがたいローカルな地名を頻繁に用いている。これらは地域の人々の共有知であり対外的・公的な地図化はされていない。そのため地名の示す空間や由来の理解は、遊牧活動の特性をも解明することとなり、本課題は、これまでの著者の遊牧社会研究〔相馬 2014, 2015a, 2016a, 2017〕と相乗効果を発揮する関係にある。

上記の問題意識を踏まえ、本報告では以下の課題 (RT<sub>1</sub> ~ RT<sub>4</sub>) を遂行した。

RT<sub>1</sub>: 在来カザフ語地名のドキュメンテーションおよび地図化

サグサイ郡における地域在来のカザフ語地名を収集・整理した。フィールドワークは2016年10月、2017年5~6月に合計約30日間実施した。同臨地・巡査調査では1986年に社会主義体制下で発行された各県毎の“Газар Нутгийн Нэрийн Зураг”(『モンゴル地名地図』)をもとに、現地の遊牧民や居住者、長老・古考からモンゴル語地名との対応や非対応をインタビューにより記録した。

RT<sub>2</sub>: モンゴル語地名語彙の計量分析

モンゴル国内で2004年に編集された“Монгол газар нутгийн нэрийн зүйлчилсэн

ТОЛЬ”（『モンゴル地名分類大辞典』）[Равдан 2004]に掲載されている、バヤン・ウルギー県サグサイ郡の地名 865 件すべてを抜き出してリスト化した。これら地名に含まれる単語（語彙構成要素）を項目別に分類（コーディング）し、地名語彙の計量分析を行った。調査対象地の比較として、同県アルタイ村（n=495 件）、アルタン・ツォグツ村（n=502 件）の 2 カ村の地名分類・定量分析も合わせて実施した。調査はモンゴル国立大学のモンゴル人学生 2 名に協力を依頼し、サグサイ、アルタイ、アルタン・ツォグツ各郡内の「地名」「地形カテゴリー」を抜き出しリスト化した。これら地名の地名構成要素（単語）をメタデータとして、分類・計量数値化した。分析対象となっている地名は、すべて「現代モンゴル語」を対象とした。

#### RT<sub>3</sub>：イヌワシ捕獲地点と土地利用観

地域の特徴的な土地利用観のひとつであるイヌワシ捕獲地について、構成的インタビューをもとに特定した。調査期間中、現地に現存するイーグルハンター n=41 名に構成的インタビューを実施して該当データを収集した。本報告では、現地カザフ伝統文化を代表する騎馬鷹狩に関連して、「イヌワシの捕獲地」の特定とその在来地名について報告する。

#### RT<sub>4</sub>：地名由来のオーラルヒストリー

同臨地調査では、在来地名の語源や由来を示す民間伝承・オーラルヒストリーを収集した。その一部は現地在住の作家シナイ・ラフメット氏収集の民話などを一部参照した。以上、4 系統の課題達成により、アルタイ地域の地理空間認識と、遊牧世界の文脈とを合わせて総合的に解明することを、本研究の最終目標としている。

## 2.2. 調査対象地の概要

モンゴル西部バヤン・ウルギー県はモンゴル西端に位置し、県域は約 45,705km<sup>2</sup> で [Баян - Олгий Аймаг 2012]、九州に沖縄本島を加えた面積とほぼ等しい（日本国土のおよそ 1/8）。アルタイ山脈一帯の大部分は、「山岳草原・ツンドラ帯（Altai Alpine Meadow and Tundra）」と「山岳性森林ステップ帯（Altai Montane Forest and Forest Steppe）」の 2 種類で構成されている [Heiner et al. 2011:4]。アルタイ地域は土壤堆積の少なさから高木はほとんど繁茂しておらず、ゴビ砂漠一帯を除くと森林植生が全国でもっとも少ない土地となっている。しかし反面、水資源の豊かな地域であり、県域の地表面の湖水面積はモンゴル国内でもっとも高い数値を示す [National Statistical Office of Mongolia (NSO) 2009]。地表面からの取水が容易なことに加え、タバン・ボグド Таван Богд 山系、ツエンゲル・ハイルハン Цэнгэр Хайрхан 山系などから、ミネラル成分の高い氷河の融水河川がホブド河を中心に県内各所を流れている [相馬 2014]。

県内人口はおよそ 100,800 人であり、その 90.0% 以上をアルタイ系カザフ人が占める。ウルギーと各郡の定住中心部（ソムセンター）の定住者約 32,000 人を除くと、県内人口の約 78,000 人（78.0%）が、移動牧畜の従事者（以下、マルチン）と推計される [NSO 2012]。同県のカザフ人コミュニティは、1820 年代頃（一説には 1840 年代から）にはじまる中国西部地域（現在の新疆ウイグル自治区）からの断続的な移住・流入により形成されてきた [Diener 2009:162; Barcus and Werner 2010: 212]。バヤン・ウルギー県は 1940 年に、事実上カザフ人の「自治県」として成立し、1942 年には現在の 13 郡域が形成された。その後、1990 年代には、カザフスタンが推進した「本国外」人口の呼び戻し（国外カザフ人召還移民政策）により、断続的に人口が流出した。

アルタイ地域に根づいたカザフ・コミュニティは、モンゴルではもっとも「新しい」移住集団とされている。ただし同県では現在でも、伝統的な「季節移動型牧畜活動（遊牧）」が、地域社会の生産・経済活動の根幹をなしている。そのため、現地では中国やカザフスタンのカザフ人コミュニティでは

見られなくなった「古式カザフ」の言語と無形文化「騎馬鷹狩文化」「狩猟と資源採集」「刺繡やフェルト絨毯の製作」「馬技」などが、牧畜文化の伝統と密接に結びついていまも息づいている。牧畜社会における季節移動や酪農生産の形態をはじめ、その文化、社会、宗教、牧畜観も、いわゆるハルハ系モンゴル人の牧畜世界とは異なる文脈の上に成り立っている。現地のカザフ人牧畜社会とは、いわゆるモンゴル人の経験したポスト社会主义時代とは異なる力動感にもとづく、人的流動の重層により形成された [相馬 2014]。そのため、バヤン・ウルギー県内にはカザフ語とモンゴル語の地名が混在する、独特の地名文化が成立することとなった。

### 2.3. 世帯毎の所有家畜総頭数と種別構成率

主要調査地サグサイ郡は、13郡のなかでももっともカザフ人人口比が高い。そのため、在来カザフ語地名のフィールドワーク適地として選定した。郡内人口は約5,100人、郡域は3,134km<sup>2</sup>で南北に細長い形状をしている [Bayan-Ölgii Aimag Annual Statistical Report 2008]。

サグサイ村は中心部周辺でも多数の牧畜生活者が居住しており、ソムセンターの西側に隣接するブテウ冬営地（BWP）には約50世帯のマルチンが居住している。このうち、44世帯の家畜所有総頭数（T.L.P.）を調査したところ、成畜3,819頭、幼畜1,542頭、合計は5,361頭であった（表1）。世帯ごとの成獣家畜の平均所有数（最大／最少の2世帯を除く）はおよそ76.9頭（幼畜含めて107.4頭）となり、その内訳はウマ2.9頭（3.65%）、ウシ6.3頭（7.8%）、ヒツジ28.0頭（37.3%）、ヤギ39.6頭（51.3%）であった。ラクダ所有世帯は3家族で4頭（0.1%）のみで、その利用方法は運搬目的であった。成畜と幼畜の比率は71.2%／28.8%であり、全体の3割程度が春先に生まれた幼畜であることが確認された [相馬 2014]。

表1 ブテウ冬営地の階層別家畜所有数（2014年9月時点）

対象世帯*	成獣						幼獣						総計	
	ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計(頭)	ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計(頭)		
Lg (n=7)	個体数:	3	32	76	595	845	1,551	0	10	28	252	300	590	2,141
	平均値:	0	5	11	85	121	222	0	1	4	36	43	84	306
	構成率:	0.2%	2.1%	4.9%	38.4%	54.5%		0.0%	1.7%	4.7%	42.7%	50.8%		
Mg (n=15)	個体数:	0	52	113	588	703	1,456	0	22	51	226	260	559	2,015
	平均値:	0	3	8	39	47	97	0	1	3	15	17	37	134
	構成率:	0.0%	3.6%	7.8%	40.4%	48.3%		0.0%	3.9%	9.1%	40.4%	46.5%		
Sg (n=22)	個体数:	1	52	109	240	410	812	1	17	55	119	201	393	1,205
	平均値:	0	2	5	11	19	37	0	1	3	5	9	18	55
	構成率:	0.1%	6.4%	13.4%	29.6%	50.5%		0.3%	4.3%	14.0%	30.3%	51.1%		
合計(頭):	4	136	298	1,423	1,958	3,819	1	49	134	597	761	1,542	5,361	
構成率(%):	0.1%	3.6%	7.8%	37.3%	51.3%		0.1%	3.2%	8.7%	38.7%	49.4%			

\*所有総頭数に応じて3グループに分類

全家畜の所有平均数で中央値に近い「101頭」を基準とし、世帯（HHs）毎に保有する成獣頭数に応じて以下の3階層に分類した。

小規模家畜群保有者（Sg） : 100頭≤

中規模家畜群保有者（Mg） : 101～200頭

大規模家畜群保有者（Lg） : ≤ 201頭

この分類に従うと、Lg世帯7HHs（15.9%）、Mg世帯15HHs（27.6%）、Sg世帯22HHs（50.0%）となった。調査対象世帯の約5割がSg世帯に相当し、低所得・低収益の小規模経営で生計を立てていると思われる。全体的にサグサイ郡の牧畜生産性はそれほど高くはなく、小規模な家畜群を有するモンゴル国内の典型的な「貧困村」と位置付けられる。

## 2.4. 季節移動と土地利用

バヤン・ウルギー県は通年で遊牧活動が展開され、生業の基盤となっている。サグサイ村のソムセンターに近い各冬営地からの季節移動は、家畜所有頭数に応じて「チイ夏営地（CSP）」、「カク夏営地（KSP）」、「dain夏営地（DSP）」、の3カ所へ向けて行われる。ブテウ冬営地の東側に隣接する CSP へ移動するマルチンは約 20 家族、ツェンゲル・ハイルハン山麓の KSP へは約 18 家族、DSP へは約 20～25 家族が移動する。夏営地で 9 月 1 日までの 80～90 日間、長ければ 9 月末までの 120～130 日間を過ごす。その大部分は 9 月 1 日～7 日頃には再び冬牧場へと戻るが、草原の状態によって 10 月 20 日前後まで滞在する家族もみられる。

サグサイでは所有する家畜飼育数（T.L.P.）に応じて、移動地を選定する。大規模家畜群の所有者はdainやカクへ、小規模牧畜世帯はチイへと移動する傾向がある。dain地方はdain湖のから南方の高原地帯に広がり、豊富な牧草資源が利用できる（図 2）。またサグサイでは中心部付近に居住する大部分の中規模牧畜世帯はカク夏牧場に移動するため、同地方は牧畜生活上大きな意味を持つ。カク地方は標高 2,600～2,900m の冷涼な高原地帯に広がり、水利と牧草に恵まれた放牧環境が整っている（図 3）。BWP からの移動距離は最遠地点までの移動で約 48.1km あり、自動車で 3.5～4.0 時間の距離にある。この場所には例年およそ 60 世帯が周辺から集住する。KSP や DSP へと移動するマルチンの多くは、Mg 世帯もしくは 500 頭以上の Lg 世帯にほぼ限られる。CSP での放牧環境では、家畜飼養がまかないきれないマルチンが移動する。そのため現代の季節移動は、家畜保有数に応じて遠距離



図 2 ダイン湖と周辺の夏牧場

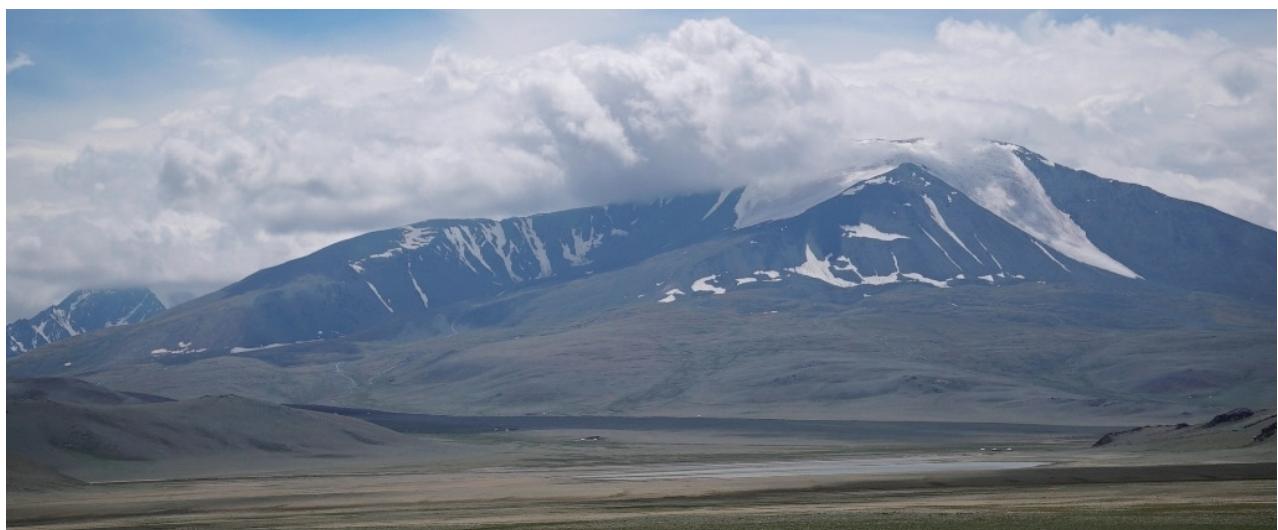


図 3 ツェンゲル・ハイルハン峰とカク地方の夏牧場

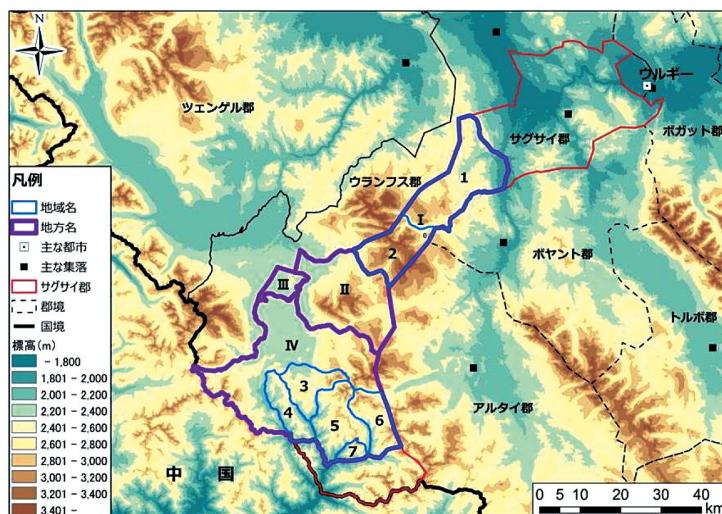
と近距離に二分化する傾向がみられる〔相馬 2014〕。

夏季の移動は例年6月5日～15日の間に行われ、遅くとも6月20日頃までには夏営地へと移動する。この移動時期は現在、行政指導によってほぼ義務化されている。現代のアルタイでは、通常は夏営地／冬営地の2地点間、もしくは秋営地を加えた3地点間の移動が行われる。春牧場を加えた4地点間移動はほとんど見られなくなり、調査地では5家族のみが確認された。9月にブテウ冬営地に戻っても、ほとんどの家庭は10月15日前後まで固定家屋の左側（南側）に天幕を立てて生活する。

### 3. 結果① RM1. 在来カザフ語地名のドキュメンテーションと地図化

#### 3.1. 在来の古カザフ語地名地図

同課題では、モンゴルで社会主義時代に作成されたバヤン・ウルギー県サグサイ郡のモンゴル語地名地図『Газар Нутгийн Нэрний Зураг』(1986) をもとに、地域の古老・長老・年長者を訪問し、カザフ語での表記・別名などを聞き取り調査により記録した。調査には現地のモンゴル語・カザフ語のネイティヴ話者ラシン・アリカン氏および、モンゴル国立大学の言語学者エンフ・ジャルガル・プレブ氏とともに聞き取りを行った。サグサイ郡内で在来のカザフ語地名を全105件記録・収集した。これら収集された地名の位置・空間範囲・領域はArcGISにより地図化した。地図II-1にサグサイ郡全域図を記し、伝統的な地域区分を示した。サグサイ郡の在来の地理空間区分には3階層 [1. 地方／2. 地域／3. 在来地] のレベルが確認された。「1. 地方名 (n=4)」および「2. 地域名 (n=7)」は表2に一覧を示した。その下位区分である「3. 在来地名 (n=94)」は表3に一覧を示



地図II-1 サグサイ郡の地方名

表2 サグサイ郡の地方名および地域名

1. 地方名	2. 地域名	3. 在来地名 収集数
I カク	1 デード・カク 2 ドード・カク	17件
II アクコル		4件
III タスト		4件
IV ダイン	3 ソングント 4 カラ・ジャマト 5 ヨルト 6 ベク	69件

し、地図Ⅱ-2にその所在を示した。

在来カザフ語地名は、地形的・伝承的特色などにもとづき、その命名が行われてきた。またその範囲は地形の特性（稜線、河床、渓谷、河川など）にもとづいている。カザフ語地名の構成要素（単語）を計量した結果を図4に示した。地名の構成要素（単語／語幹）は15分類に可能で、もっとも頻度の高い地名要素は「人名」(n=15)であった。そのほか、僅差で「色彩」「植物」「地形」の順となった。

サグサイ南部のアルタイ深部は人口寡少地であり、在来地利用者により寡占的な占有状態にあったことが、人名がそのまま地名として残ることにつながったと推測される。またアルタイとサグサイに

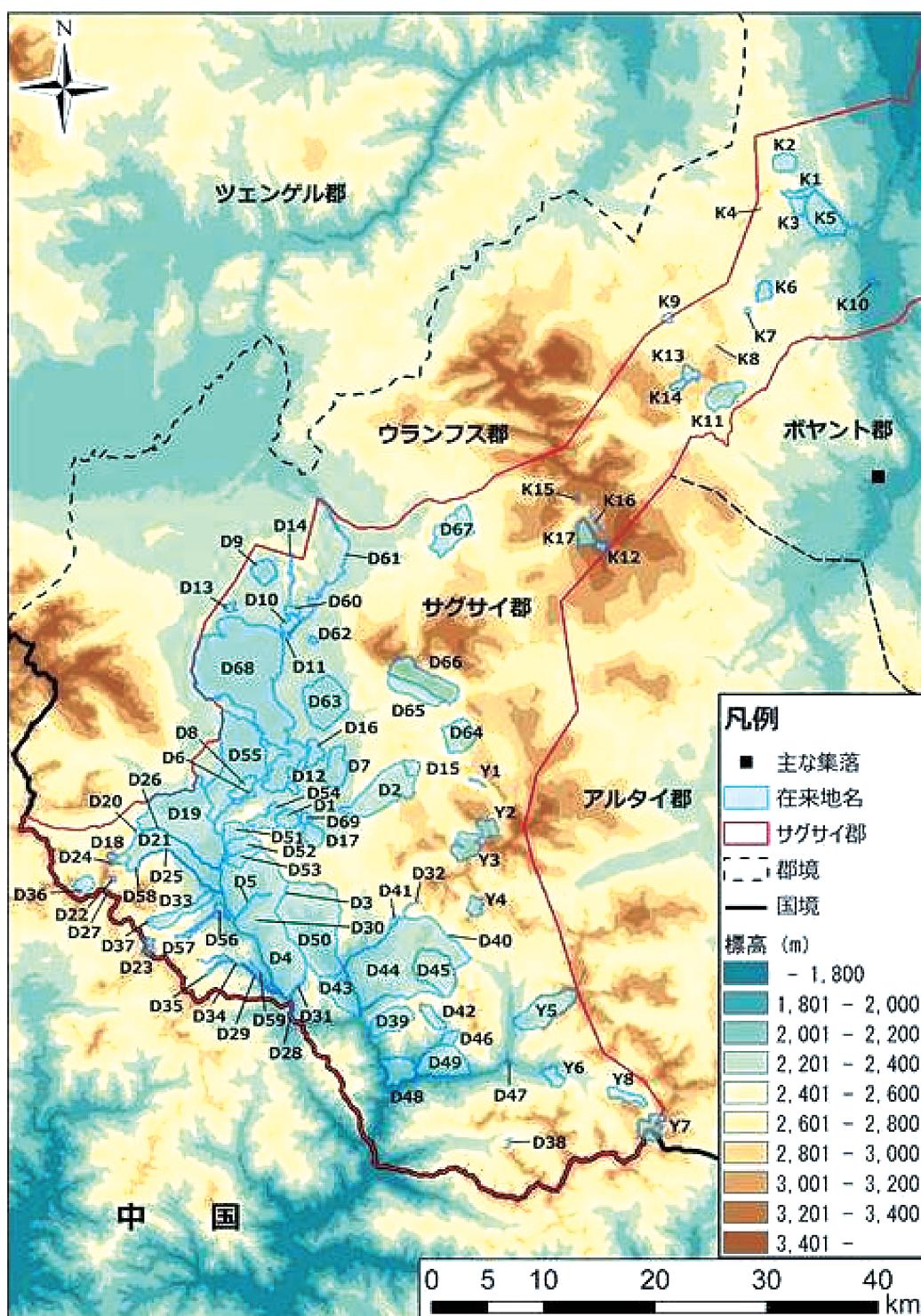


表3 在来古カザフ語地名一覧\* (1/3)

地方区分	コードno.	カザフ語表記	日本語表記	カザフ語意味	地方区分	コードno.	カザフ語表記	日本語表記	カザフ語意味
ダイソ	D1	Кара басагаш	カラバシュ・アガシュ	頂点が黒い木	ダイソ	D36	күркіреме	クルクルメ	滝
	D2	Кызыл жыра	クズル・ジュラ	赤い谷		D37	сұық көл	スク・コル	冷たい湖
	D3	бошекен мойнақ	ボシュケン・モイナク	ボシュン氏の峠		D38	қызыжкоп	キイン・ジル	困難な道
	D4	Кара жаматы	カラ・ジャマト	黒いヤギがいる場所		D39	шолак сай 2	ショラク・サイ②	通れない山の谷②
	D5	ащылы булак	Ашыл・ブルак	ホジルのある泉		D40	-----	-----	金の谷の湧水?
	D6	есін	エンク	崖		D41	қызыл күнгей	クズル・クンゲイ	赤い南斜面
	D7	арқаплық мойнақ	アルカルク・モイナク	アルカルク氏の峠		D42	агай сай	アガイ・サイ	アガイ氏の谷
	D8	шоқ Қарғай	ショク・カラガイ	黒松のかたまり		D43	кудібай сай	クトバイ・サイ	クハイ氏の谷
	D9	жапанаш	ジャランガシ	裸／植物名“アヤメ”		D44	үлкен жайлай сай	ウルケン・シャイラウ・サイ	おおむき夏牧場の谷
	D10	кеп белйт	ケプ・ベイト	墓のたさんある場所		D45	күргак сай	クルガク・サイ	乾燥している谷
	D11	шумек	ショメク	湖からの流出河川の始まり		D46	кен етек	ケン・エテク	広い裾
	D12	ку ўй	コ・ウイ	色褪せた家		D47	стадион тау	スタディオン・サイ	天然のスタジアムのような山
	D13	амбыя бұлак	アンビア・ブルак	アンビア氏の泉 (小川)		D48	жаматы күнгей	ジマタト・クンゲイ	ヤキひるの南斜面
	D14	бакшы жопы	バクシ・ジョル	バクシ氏の道		D49	бекті тау	ベクト・タウ	ベク (手) のある山
	D15	астауша	アスタウシャ	?		D50	бошекен сай	ボシュケン・サイ	ボシュケン氏の谷
	D16	сасық көл	サスク・クル	くさい湖		D51	жарқан сай	ジャルカリ・サイ	ジルカリ氏の谷
	D17	бас қарғай	バス・カラガイ	一番の黒松		D52	майдай сай	マハイ・サイ	マハイ氏の谷
	D18	кара айыр қабагы	カラ・アイグル・カバグ	黒い種馬の崖		D53	барданбай сай	バルダーバイ・サイ	バルダーバイ氏の谷
	D19	бел бұйра	ベル・ブリラ	山脈のボーログ?		D54	ку қарғай	コ・カラガイ	乾燥している黒松
	D20	көс көл	コス・コレ	2つの湖		D55	сары бұйра	サル・ブリラ	黄色いボーログ
	D21	түкір бұйра	トクブル・ブリラ	一番奥のボーログ		D56	сары төбе	サル・トゥベ	黄色の丘
	D22	үй тас	ウイ・タス	家の形をした石		D57	ащылы сай	アシユル・サイ	ホジルのある谷
	D23	емшек тәбә	エムチエク・トゥベ	おっぽいの丘		D58	үкен тасты бұлак	ウケン・タスト・ブルак	石のたくさんある小川
	D24	жапғыз күнгей	ジルグス・クンゲイ	たつじひとつの南斜面		D59	иық қара	イク・カラ	肩の黒
	D25	барса кепмес	バルサ・カルメス	行ったら帰ってもらえない (場所)		D60	ой қарғай	オイ・カラガイ	カラツツの林
	D26	тасты үлпак	タストゥ・ブルак	石のある小川		D61	әсем су	エセム・スー	きれいな河
	D27	бәлекей сай	バルケイ・サイ	バレケイ氏の谷		D62	сары бастау	サル・バスタウ	黄色い泉
	D28	ешкі өлген	エンク・ウルゲン	ヤギの死んだ丘		D63	колагаш бұйрасы	コラガシュ・ビラス	どうぼうノ植林のあるボーログ
	D29	естек сай	エステク・サイ	エステク(?)の谷		D64	Каранғыты	カラングト	(翻訳不能)
	D30	бүркіт сай	ブルクット・サイ	イヌワシの谷		D65	корымды	コルムド	岩塊のある場所
	D31	орынбай сай	オランバ・サイ	オランバ氏の谷		D66	ақ қарым тау	アク・コルム・タウ	白い岩塊のある山
	D32	күдібай сай	クトバイ・サイ	クトバイ氏の谷		D67	бес көл	ベス・コル	5つの湖
	D33	ши мойын сай	シモイン・サイ	シモイン族 (ナイマン) の谷		D68	даян көл	Дайн・コル	すべてそろった湖
	D34	қыпшал өзөні	クフシャル・ウゼン	深い谷間の河		D69	сұық сай	スク・サイ	寒い谷
	D35	шолак сай 1	ショラク・サイ①	通れない峠の谷①					

\* サグサイ村での聞き取り調査により特定した

表3 在来古カザフ語地名一覧\* (2/3)

地方区分	コードno.	カザフ語表記	日本語表記	カザフ語意味
ヨルト	Y1	қос көл	コス・コレ	2つの湖
	Y2	пышак жал	ブンヤク・ジャル	ナイフのように細い馬の蹄 (ジャル)
	Y3	кыын тау?	キイン・タウ?	困難な山
	Y4	мамырбай сай	マムルバイ・サイ	マムルバイ氏の谷
	Y5	үзин аша	ウズン・アシャー	長い枝分かれ
	Y6	быллылдақ	ブリブルダク	「沼のある柔らかい土地」の意
	Y7	тестік тау	トウスク・タウ	胸骨のかたちの山
	Y8	сары қамыр	サル・カムル	黄色い墓

\* サグサイ村での聞き取り調査により特定した

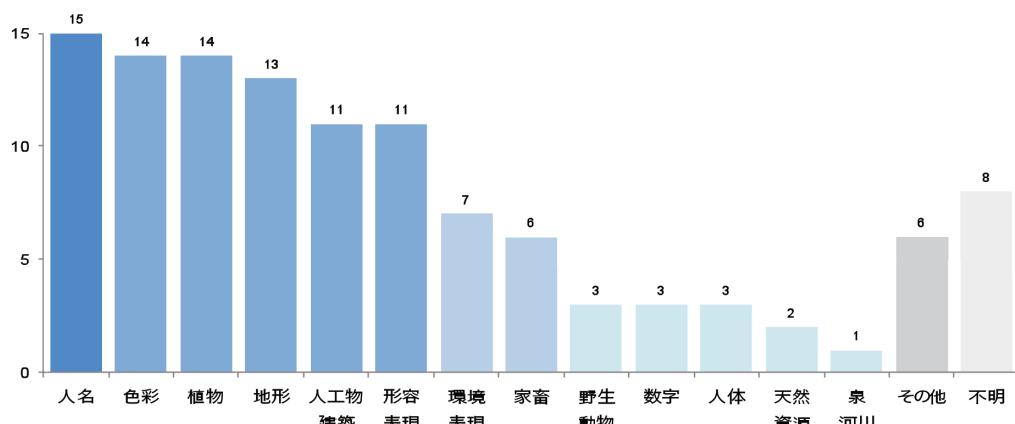
表3 在来古カザフ語地名一覧\* (3/3)

地方区分	コードno.	カザフ語表記	日本語表記	カザフ語意味
カク	K1	сарымсақ үй	サルムサク・ワイ	ネギの家
	K2	үшікі тас	ウシル・タス	険しい石
	K3	сарымсақ тәбә	サルムサク・トゥベ	ネギの丘
	K4	шипіл қудық	シル・クドウク	ススキの戸戸
	K5	тошант	トシント	(不明)
	K6	кең төбе	コク・トゥベ	蒼い丘
	K7	жол сай	ジョル・サイ	道の谷
	K8	кішікене қара су	クシユネ・カラ・ス-	小さい黒い水
	K9	қак	カク	苔
	K10	зост тәбә	ゾスト・トゥベ	朱染料のある丘
	K11	обапы	オバル	オボーガーある土地
	K12	муз тау	ムズ・タウ	氷の山
	K13	үлкен мүшіну	ウルケン・ムシュク	曲がりくねった山 (大)
	K14	кіші мүшіну	クシユ・ムシュク	曲がりくねった山 (小)
	K15	майкан төбе	マイレン・トゥベ	アントの丘
	K16	корымдық	コルム・ドウク	岩塊
	K17	ақ тасты	アク・タスト	白い石のある土地

\* サグサイ村での聞き取り調査により特定した

は、植物名の付された地名が比較的多くみられ、全地名群の 6.5 ~ 7.0% を占める。

地図 II - 1 ~ 2 をもとに在来のカザフ語地名の分布的特徴をみると、その多くが郡南の山岳地域に残されていることがわかる。一方、北部では、モンゴル語の通用名が普及しており、カザフ語との併用



[地名構成要素 合計 n + 117 件]

は減少する傾向にある。モンゴル語地名のカザフ語別名やカザフ語特有の地名表現はほとんど聞かれてなかった。在来のカザフ語地名がダイン地方に集中していることから、カザフ人の定着性と占有率の高さがうかがわれる。実際、サグサイ南部にはモンゴル人居住者はほとんど見られない。かつての証言によると、サグサイ村では郡北にはウリヤンカイ系モンゴル人が1960年代～70年代頃まで多数居住していたとされ、カザフ人居住者は後進集団とされている。この証言は、サグサイ北部に在来カザフ語地名がほとんど残っていないこととも一致している。郡南のダイン地方は遠隔地であることから、モンゴル人による目立った大規模集落は営まれなかっただ可能性がある。こうした歴史的背景は、在来カザフ語地名の残存状況にも反映されているように思われる。そのため、地元の一部モンゴル人のあいだでは在来のカザフ語地名は古来続くモンゴル語地名の転訛や置き換えと否定的に考える傾向もある。

カザフ人はエスニック・マイノリティ集団と「定義」され、社会的・政治的に被抑圧的立場にある。そのため、カザフ人たちは20世紀前半期頃には、モンゴル人に圧迫される形で遠隔地のダイン地方での生活を営まざるを得なかっただ可能性が考えられる。そのため、サグサイ郡南には在来カザフ語地名が多数残されるようになり、モンゴル人人口の減少とともに、サグサイ郡北にも多数が定着するようになったと推察される。

## 4. 結果② RM2. モンゴル語地名語彙の計量分析

### 4.1. 地名語彙から探る地理的・土地利用的特性

モンゴル語地名語彙の計量分析では、サグサイ、アルタイ、アルタン・ツォグツの3カ郡内の地名1,862件を抜出した。これら地名構成要素（単語・語彙）の成分カテゴリーから、以下の13カテゴリーに任意で小分類を行った。小分類にもとづく集計データのクラスター分析（ウォード法／距離）の結果を踏まえ、以下の3項目に大分類を行った（表4）。

#### A. 地理的分類目

A1. 地形／A2. 位置・方角・形状／A3. 色彩

#### B. 生態的分類目

B1. 植物／B2. 動物

#### C. 質的分類目

C1. 形容表現／C2. 道具／C3. 人物・人名・人体／C4. 数字／C5. 建物／C6. 食物／C7. 地名

／C8. その他

もっとも地名に多く付された単語は①地形、②位置・方角・形状、③色彩で、全体の60.5%（n=1,127）を占めている。これら地形的・物理的形状にもとづく「A. 地理的分類目」とし、③植物、④動物を「B.

表4 モンゴル語地名の分類項目

対象村域	A. 地理的分類目			B. 生態的分類目		C. 質的分類目								合計 (件数)
	A1 地形	A2 位置 方角 形状	A3 色彩	B1 植物	B2 動物	C1 形容 表現	C2 道具	C3 人物 人名 人体	C4 数字	C5 建物 人工物	C6 食物	C7 地名	C8 その他	
	89種	56種	16種	29種	26種	67種	51種	32種	7種	16種	6種	7種	50種	452種
アルタイ村	131	81	102	39	12	46	35	18	11	4	3	4	9	495
アルタントソグツ村	93	86	100	29	19	49	24	31	10	16	1	0	44	502
サグサイ村	215	187	132	57	50	76	42	30	13	14	7	5	37	865
合計	439	354	334	125	81	171	101	79	34	34	11	9	90	1862
出現比率	23.6%	19.0%	17.9%	6.7%	4.4%	9.2%	5.4%	4.2%	1.8%	1.8%	0.6%	0.5%	4.8%	

F(1/12)=4.74<6.43 / P=0.02<0.05 S.

F(1/12)=2.68<6.53 / P=0.001<0.05 S.

生態的分類目」、その他の8カテゴリーについては、「C. 質的分類目」と大分類した。

小分類では、出現回数が1回のみの項目は「その他」として分類した。対象地域3ヵ村で出現回数10件以上の上位23分類項について分散分析を行ったところ、地物分類についての地域間に有意差は見られなかった [ $F(4/135)=2.43 > 1.34 / P=0.25 > 0.05$ ]。

#### 【A. 地理的分類目】

A1. 地形： 地理的・地形的カテゴリーには89種類を分類した。同カテゴリーでは、とくに「岩」(n=59)のつく地名が卓越して多く、その61.0%はサグサイに見られる。「台地」「石」「岩塊」「泉」「斜面」はいずれも同程度で頻出の地名語幹となっている。また、「水 ソウ」「川 ゴル」の付された地名はすべてサグサイで見られた。

A2. 位置・方角・形状： 物理的なサイズ、形状など56種を分類した。要素では「小」「大」の付された地名が多く、その大部分がサグサイ村域に見られた。「中」「尖った」の付された地名も比較的多くみられる(n=19)。方角では「北」「南」および「東」「西」の順の頻度でみられた。

A3. 色彩： 色彩カテゴリーは16種を分類した。質的分類目では、色彩の引用による地名が最も多く、なかでも「黒(ハル)」(n=69)がもっともおおい。またほぼ同数で「赤(オラーン)」(n=67)が地名に用いられる傾向にある。次いで「白」(n=58)、「青」(n=42)、「黄」(n=40)が地名呼称のなかで高い引用頻度となっている。地名に引用される色彩は、物理的な色彩であることも多い。たとえばホブド県の「ハル・オス湖(黒い湖)」はタンニン成分により黒っぽい水を蓄えている。また「ハル・オール(黒い山)」なども、玄武岩質で黒っぽい岩肌の山地に命名される傾向がある。

「A. 地理的分類目」カテゴリーは、対象3ヵ村のモンゴル語の在来地名件数の60.5%を占めている。そのため、地理的、地形的、物理的形象が地名由来に多くあてはまる傾向がみられた。

#### 【B. 生態的分類目】

B1. 植物： 植物カテゴリーについては29種を分類した。特定植物種としては、乾燥地に繁茂する低木「カラガン Хараган」(マメ科ムレスズメ科 Caragana spp.) (n=15)が付されることがもっとも多い。次いで、野生の「ネギ Сонгин」(n=14)、「ヤナギ科 Бургас」(Salix spp.) (n=12)が多い。上位3項目にあがった植物は、アルタイ北部とくにサグサイ周辺に自生する地域植生でもある。そのため、植物の名称は地域植生を比較的忠実に表現していると考えられる。

遊牧生活では、カラガンの低木の繁茂する土地は、とくに風雪を避けるための春・秋牧場として利用される(図5)。また、自生する野生のネギは、自家消費や販売目的で8月中旬ころか



図5 カラガン林に秋营地を作る牧畜家族



図6 採集されたサグサイ周辺に自生するネギ

ら収穫される（図6）。サグサイ南部のダイン地方には「ソンゲント地方（ネギのある土地）」という地方もあり、夏牧場として利用される。

B2. 動物： 動物カテゴリーについては26種を分類した。とくに頻出する要素は、1. ヤギ、2. ハゲタカ、3. 鹿、4. ラクダ、5. コノハズク、となっている。ヤギはアルタイを代表する小家畜であり、その域内飼育頭数はヒツジをはるかに上回っている。サグサイ村に隣接する夏牧場では、ヒツジ・ヤギ比率（S/Gr）は42.8%：57.2%、バヤン・ウルギー県南部ボルガン郡では29.4%：70.6%でヤギがヒツジに卓越する〔相馬2014〕。とくに「ヤギ」のつく地名（n=20）はサグサイ域内に多くみられる。起伏が激しく、とくに北部は牧草地が過少な地形特性では、ヒツジよりもヤギが優勢種として遊牧民の生活で利用されてきた生活誌を推測させる。

またサグサイの動物地名の特徴として、野生動物の地名が比較した2郡と比べてサグサイ村域に多く現れる特徴がみられる。ハゲタカ（n=7/12件）、シカ（n=5/7件）、コノハズク（n=4/6件）、キツネ（n=3/3件）、タルバガ（n=2/2件）、タカ（n=2/2件）があげられる。また地名引用回数n=1件のみの「白鳥」「スズメ」「狼」「カモシカ」「ワシ」が付された地名もサグサイだけに見られ、アルタイ郡とアルタン・ツォグツ郡では確認されなかった。人口過少で放牧などの人的生活圧の少ないダイン地方を南部に有するサグサイでは、狩猟や騎馬鷹狩が古来盛んであった。そのため、野生動物の付された地名は、サグサイの豊かな自然環境を反映している可能性がある。

### 【C. 質的分類目】

- C1. 形容表現： 形容表現カテゴリーでは67種を分類した。もっとも頻度の高い語幹は「寒い」であった。ただしアルタイ村にはこの語幹の付された地名は見られなかった。「最初の」「最後の」「速い」「大きい」「閉ざされた」は、いずれも同程度の頻度での出現が見られた。
- C2. 道具： 道具カテゴリーでは51種を分類した。「白墨」と「染料」が7件ずつでもっとも頻度が高く、顔料や染料になんらかの信奉があったことが推測される。また「聖水」と付された地名6件もみられた。
- C3. 人物・人体・人名： 人物・人体・人名カテゴリーでは32種を分類した。「腸」「心臓」「首」「あばら」などがみられたが、村ごとなどで顕著な特徴は見られなかった。前述の在来カザフ語地名では、人名の付された地名がサグサイ村域には複数確認されたが、モンゴル語ではほとんど確認されなかった。
- C4. 数字： 数字カテゴリーでは7種を分類した。なかでも「3」がもっとも地名に多くつけられる数字であり、モンゴルでは吉祥数として社会に広く浸透している。次いで「5」、「2」、「1」の順となっている。モンゴル社会では奇数が尊ばれる傾向にある。例えば、オボーの周辺を回るお参りや、民間信仰では奇数回が尊ばれることが多くみられるため、これを反映していると思われる。
- C5. 建物／C6. 食物／C7. 地名： これら3小分類は出現頻度が低く、特徴的な傾向は見いだせなかった。
- C8. その他カテゴリー： その他カテゴリーでは、分類の困難な50種を分類した。なかでも、「糞」（n=18）を含む地名が比較的多く見られた。畜糞は燃料として、厳寒の屋内・天幕内で暖を取るためになくてはならない。また家屋や厩舎の壁の漆喰として隙間をふさいだり、家畜囲いの壁面に堆積させて家畜を地面の冷気から守ることにも用いられる。また、牧草欠乏時には、馬糞は濃厚飼料に混ぜて救荒飼料としてヒツジ・ヤギ・ウシに食べさせることも行われる。畜糞は循環型の究極の資源とも位置付けられる。

## 4.2. 地形別の命名地の計量分析

前掲の『モンゴル語地名辞典』の分類項目を参照すると、モンゴルには地形・地物・土地形状など

表5 モンゴル語による地形・地物分類カテゴリー一覧\*

no.	モンゴル語	日本語	意味	no.	モンゴル語	日本語	意味
1	ам	アム	山口	44	тал	タル	草原
2	адаг	アダグ	終わり（最後）	45	тойром	トヨロム	泥沼
3	адарга	アダルガ	石がたくさんある場所	46	толгод	トルゴド	多くの丘
4	арал	アラル	島	47	толгой	トルゴイ	丘
5	ар	アル	北	48	турэн	トルゲン	速い
6	асга	アサグ	岩塊	49	тунгэ	トゥンゲ	すぎながある
7	богоч	ボゴチ	山の小さな狭路	50	тохой	トイ	川の湾曲部
8	бээрэг	ボーロル	山裾の台地	51	ус	オス	水
9	булан	ブラン	灘	52	усан сан	オサンサン	貯水地
10	булаг	ブラック	泉	53	үүл	オール	山
11	бл	ベル	山のすその野（ふもと）／山の坂斜面	54	ухаа	オハ	小山／平原の中の高所
12	бэлчир	ベルチル	川の合流地点／川が乾いた跡	55	үзүүр	ウズール	先
13	гануу	ガヌー	山の陥路	56	хавцан	ハブツアル	深くて高い谷
14	говь	ゴビ		57	хад	ハド	岩
15	гозгр	ゴズゴル	直立した	58	хаг	ハグ	岩についた苔状のもの
16	гол	ゴル	川／河川	59	хажуу	ハジュー	斜め
17	горхи	ゴルヒ	小川	60	хамар	ハマル	山の少し低くなっている部分／山の鞍部
18	гуу	グー	狭谷／川／くぼ地	61	харгайт	ハルガイ	落葉松
19	дав	タブ	？	62	хунх	フンフ	？
20	даваа	ダワー	峠	63	ховдоп	ホブゴル	心室
21	дэв	デブ	川の近くの台地	64	ховол	ホバール	とい
22	дэл	エル	馬のようないし	65	хонхор	ホンホレ	盆地
23	дэрс	デルス	すぎながある	66	хороо	ホロ	家畜小屋がある
24	дов	ドブ	岡	67	хослой	ホーリ	運河／山の広いハセマ？
25	дэвсэг	デブセグ	台地（付近より高くなった平坦な台地）	68	хөндий	フンティー	広い谷
26	дэнж	デンチ	段地／段丘／川の近くの台地	69	хормой	ホルモイ	山のふもと
27	халга	ジャラグ	狭谷	70	хотгор	ホトゴル	盆地
28	мудаа	モダー	？	71	хошуу	ホシュー	山の細くなった途切れる先／細長い部分
29	мухар	モハル	果て	72	хөдөө	フドゥ	田舎
30	ирмэг	イルメグ	先端	73	хөтөл	フツル	山の鞍部
31	намаг	ナマグ	沼	74	худаг	ホタク	井戸
32	нүруу	ノロー	山脈	75	хэр	ヒヤル	山の尾根
33	нуур	ノール	湖	76	хясаа	ヒャサー	川の上の絶壁
34	овоо	オボー	オボー	77	чулгуу	チロロー	石
35	орил	オルギル	頂上	78	шил	シリ	山の稜線上の平らな所
36	орой	オリイ	頭頂部	79	ширг	シレグ	緑草
37	рашаан	ラシャーン	聖水	80	шох	ショブフ	尖った所
38	сайр	サイル	河が乾いた跡	81	энэр	エングル	山の南のふもと
39	салаа	サラ	分かれ目	82	эрэг	エレグ	断崖
40	сархиа	サルヒヤ	凸凹した土地	83	эх	エフ	はじめ
41	сарьдаг	サルダグ	蔓延雪の山頂	84	зоо	ゾー	山の斜面の凸凹したところ
42	систем	システム	システム／工場	85	зуух	ゾーフ	小さな峡谷
43	судаг	ゾタク	凹地	86	гаталга	ガタルガ	渡り場

\*『モンゴル語地名分類大辞典』による分類を参照した

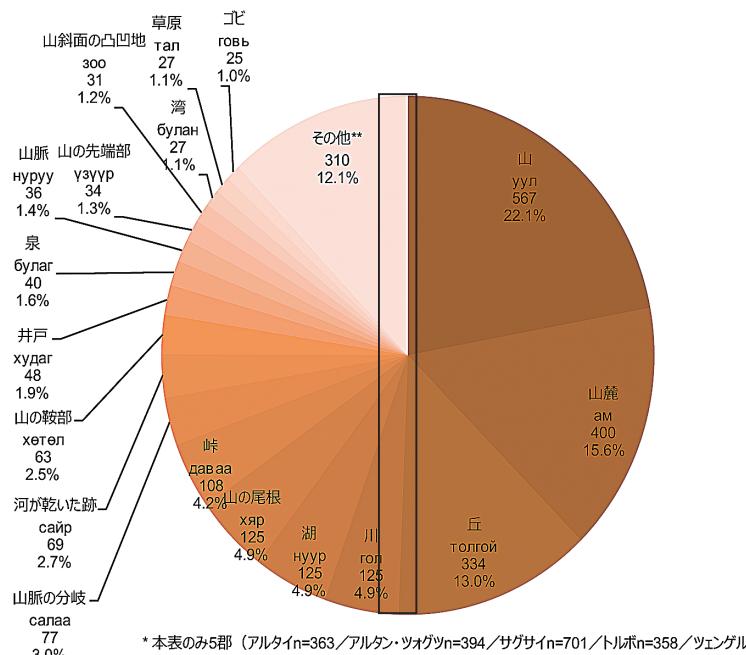
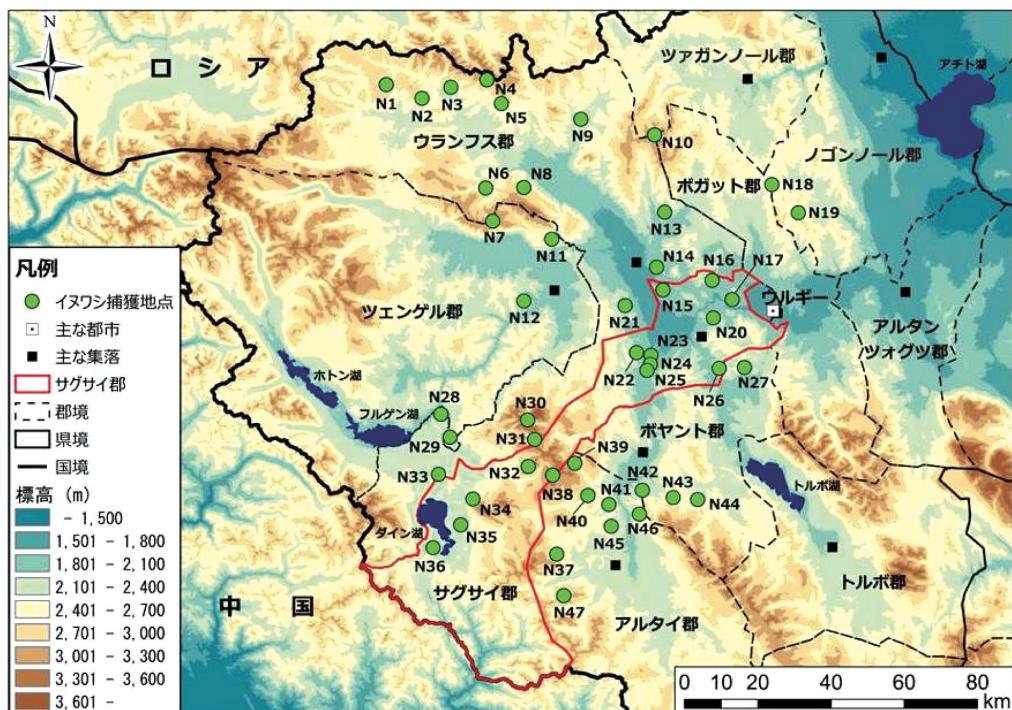


図7 地形カテゴリー集計表\*

を表すローカルな「民族地理学」上の表現が86種類確認された（表5）。モンゴル語地名の付された土地を、地形カテゴリー上位18項目を図7に集計した（本表のみ5カ郡の集計結果2,571件をもとに算出した）。アルタイ山脈に位置する地形的特徴を反映して、「山」「山麓」「丘」への命名が半数50.6%を占めている。また上位18項のうち、山に関連した項目は10項目に上る。また6項目は「水」や「水源」にかかわる土地であり、山岳地アルタイでの生活をしのばせる土地への関心の高さが見出された。

## 5. 結果③ RM3. 鶩使いとローカルなイヌワシ捕獲地点

アルタイ系カザフ人の伝統的生活のなかでも、とくに特徴的な活動としてイヌワシを手なずけて狩りを行う「騎馬鷹狩」の習慣が息づいている〔相馬2015b, 2018〕。本調査では、現地の土地利用観のなかでもとくに特徴的な活動と思われる、「イヌワシの捕獲地点」の特定と同定を行った。騎馬鷹狩で



地図III イヌワシ捕獲地

表6 イヌワシ捕獲地一覧

地図コード	在来地名	地図コード	在来地名	地図コード	在来地名
N1	ログルク?	N17	ジェルドカブルガ	N33	ヤマト
N2	ジャルパク	N18	シンダワー	N34	ジャランガシュ
N3	サルゴビ	N19	ムクルザク	N35	カラユラー
N4	コクモイナク①	N20	ブケンタウ	N36	スウクサイ
N5	コクモイナク②	N21	コグアドゥル	N37	キインウヤ
N6	バヤンタウ	N22	バクモイズ	N38	ジュルト
N7	トукテルスケイ	N23	オルタタウ	N39	チャルゴル
N8	ショガク	N24	ジャマントウベ	N40	サインブラク
N9	バインブラク	N25	シムルドウクズル	N41	ケズルサイ
N10	オイグル	N26	ウムヌゴル	N42	サルゴビ
N11	テレクト	N27	サルゴル	N43	ショクタス
N12	タランガト	N28	アラルトウベ	N44	ダワー
N13	サンガルー	N29	アクルム	N45	ボローボログスン
N14	ウシュブテウ	N30	カク	N46	カスカゴル
N15	カラタウ	N31	コシェイト	N47	コラガシュ
N16	コクショク	N32	モンゴルダラー		

は、鷲使いたちは約 2.94 年間に一度、幼鳥・成鳥のイヌワシ捕獲を行う [相馬 2016b]。イヌワシ捕獲地点はローカルな地名で識別される。これらは、行政による地理的認識とは異なっていることから、地域の土地利用観を色濃く反映した地形・地名認識としてドキュメンテーションを実施した。同調査では、全県の鷲使い 42 名にインタビューを実施し、62 地点のイヌワシ捕獲地名を記録した。そのうち地点の詳細座標が特定できた 47 地点を地図Ⅲに明記した (表 6)。

鷲使いたちはイヌワシを求める際、山地を訪れてはじめに上空を見上げて親ワシの所在を確認する。夏季に山地や夏牧場の上空で、ワシが舞うように旋回していればその地上付近に巣があるとされる。イヌワシは見晴らしのよい岩場や崖上の縁に好んで営巣を行う性質がある (図 8)。飛び立ちやすく、舞い戻りやすいイヌワシの飛翔行動に適した場所が選定される。また巣の近辺や直下はヒナワシの糞で岩肌が白っぽくなっている。鷲使いたちは営巣地点のこの現象を“サンガルー”と特別な呼び方をする。また、成鳥を捕える際には、山の斜面におとりの動物死骸を仕掛け、ネットもしくは罠 (いわゆるトラバサミ) を用いて捕獲する (図 9) [相馬 2016b]。

イーグルハンターが積極的にイヌワシ捕獲に利用する場所は、ウラン・フス北部 ( $n=15$  地点)、サグサイ ( $n=14$  地点)、アルタイ ( $n=7$  地点)、ボヤント ( $n=4$  地点) などに集中していることがわかる。これら地域は、鷲使いから優れた捕獲地点という認識が広くある。また、おおむね 2,100m 以上の高地に分布している。ツェンゲル村では鷲使いは少なく、アクセスの悪さからイヌワシ捕獲そのものがほとんど確認されなかった。そのため、ウラン・フスからサグサイ、ボヤント、アルタイに至る三日月状の地帯でのイヌワシ捕獲の傾向が確認された。またウルギー市よりも東部では、ノゴンノールとボヤントで例外的に鷹取が行われる以外、イヌワシ捕獲地は聞かれなかった。

イヌワシ捕獲地点は成鳥の捕獲も含まれているため、純粋に営巣地点を示すものではない。ただし、社会調査により特定した狩猟用イヌワシの捕獲履歴 126 件の捕獲方法を調べたところ、巣からの直接捕獲は 83 件、ネットおよび罠による捕獲は 43 件となり、65.8% は営巣地点からの捕獲と算出された。鷲使いたちは歳若い幼鳥を馴致する嗜好がある [相馬 2016b]。そのため、捕獲地点は成鳥の捕獲ではなく、イヌワシの営巣地点を示していると考えてよい。



図 8 崖上にかけられた  
イヌワシの巣

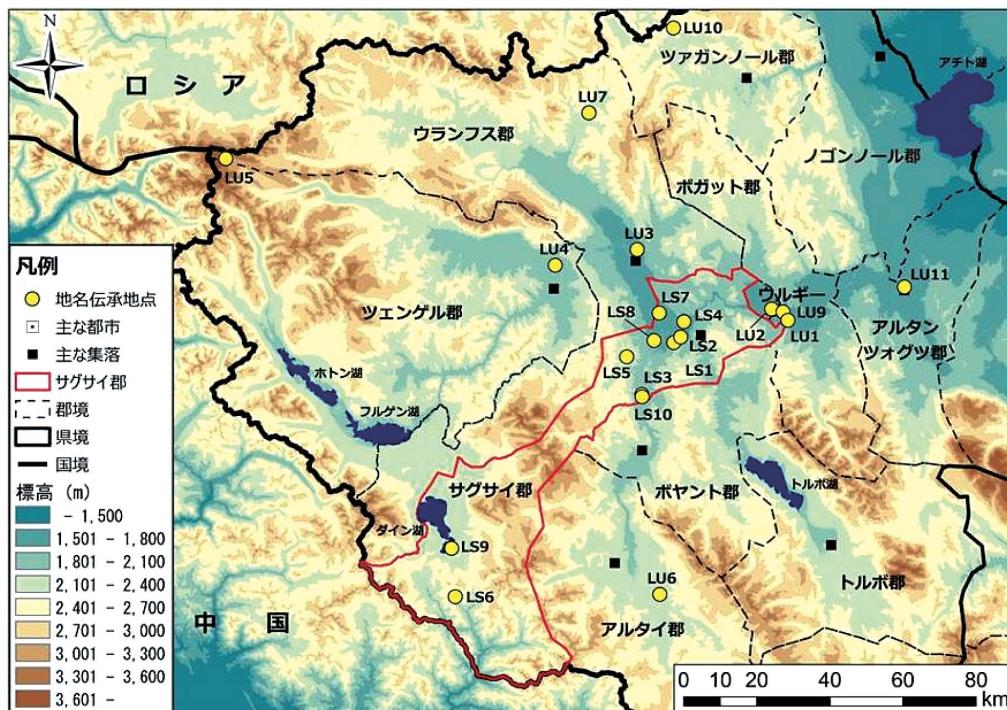


図 9 ウサギの死骸とその下に仕掛けられた  
トラバサミ

## 6. 結果④ RM4. 地名伝承のオーラルヒストリー

### 6.1. 地名由来・語源の民間伝承・オーラルヒストリー

地名の由来や語源を示す地名伝承は、サグサイの北部およびウルギー市に集中してみられた。サグサイの地名伝承のコードを LS (Legend of Sagsai)、その他地域を LU (Legend of Ulgi) として地図IVに示した（表7）。サグサイでは10件、その他県全域では11件の地名伝承が記録・収集された。個別の分析や歴史的検証の途中のため、補助的にリストとして以下に列挙した。



地図IV 地名伝承地

表7 地名伝承・オーラルヒストリーのコード一覧

地域	コード no.	地名 カザフ語／モンゴル語表記	地名 日本語表記	意味	地名由来
サグサイ	LS1		ジャマン・トゥベ	悪い丘	伝承
	LS2		システム・シャザガ	ジャザガ工場	(不明)
	LS3		ダーフレー／サグサイ・フレー	大きな集落	伝承
	LS4		サグサイ	スキの穗先?	植物
	LS5		モドン・フヨー	木の集落	伝承
	LS6		ボシュケン・サイ	ボシュケン氏の谷	人名
	LS7		ブテウ	(不明)	伝承
	LS8		ジュルクバイ・カバグ (シャル・エリク)	ジュルクバイ氏の崖	人名
	LS9		アルカルク・ダワー	アクカルク氏の峠	伝承
	LS10		ボルハン・ノール	(仏像の湖)	伝承
ウルギー および 全県域	LU1	Өлгий	ウルギー	搖籃	地形・伝承
	LU2	Меден арал	メデン・アラル	通信の島	通信
	LU3	Акбалашик	アケ・バルシク	白壁の家	伝承
	LU4	Демик толгой	デミク・トルゴイ	(デミク氏の丘)	人名
	LU5	Потанины мөсөн гол	ボタニニー・ムスン・ゴル	(ボタニン氷河)	人名
	LU6	Соьыс төбе	ソギス・トゥベ	戦争の丘	伝承
	LU7	Апивын Тубек	アピーン・トゥベク	薬草の半島	植物
	LU8	Додыгай тактасы	ドディガイ・タクタシー	ドディガイ氏の机	人名
	LU9	Хасбаатарын хар толгой	ハスバーターン・ハラ・トルゴイ	ハスバータル氏の黒い丘	人名
	LU10	Улаан байшинт	オラーン・バイシンタ	赤い建物	伝承
	LU11	Алтанцөгц	アルタン・ツォグツ	金の器	伝承

## 6.2. サグサイ村の地名伝承

### LS1. ジャマン・トゥベ 「悪い丘」

- ①モンゴル人が土葬しないで遺体を置いていたため、この名がつけられた
- ②中国から移住してきた官人の住んでいたところだった（中国人の居留地）。この中国人たちは伝染病にかかってひとり、またひとりと死んでいったため、誰も近寄らなくなってしまった。最後の一人が亡くなったとき、トゥケンバイ氏が勇気を出してこの場所を訪れ、遺体を土葬した。このとき「トティアイン」という薬を全身に塗っていたところ、体中の皮膚がすべて剥がれ落ちて病気にはならなかった [ソルタンバイ氏談]。
- ③昔、この地に母と子の2人が暮らしていた。あるとき、息子が重い病にかかってしまった。「この子の病を治すために、わたしを身代わりにしてください！」と母がうつたえたところ、悪魔が現れた。すると母は自分の命が惜しくなり、「病にかかっているのは息子の方です」と切り返した。悪魔は息子の命を奪って消え去り、母は結局「悪い人間」とみなされるようになった。この逸話からジャマン・トゥベ（悪い丘）という地名で呼ばれるようになったとされる [バイマンダイ氏談]

### LS2. システム・ジャザガ

「この場所に、お金持ちのボイテク氏が住んでいて、たくさんの馬を飼育していた。その馬はすべて黒色で統一されていた。毎日馬2～3頭を訓練していたのを見かけた。当時は大きな競馬やナーダム祭などはなかったから、駿馬を育てて逆に狼を追いかけるためだったのかもしれない。狼害対策の一環だったのだろう」 [バイマンダイ氏？談]。

### LS3. ダーフレー 「大集落」

いまのゾストはかつて「ダー・フレー」（別名：サグサイフレー）と呼ばれていた。往時は大勢の僧侶が住んでいた。この場所には「サルタグタイ・バトルの伝説」が伝わっている。スルタグタイという大男が馬に乗ってアルタイ西側へ去って行った。その馬の蹄は3mもあったという。この馬に水をあたえるためにスコップで3回土を掘ったところ、これが3つの丘になった。掘り返した場所はいまのボルハン・ノール（LS10）となった。サグサイからゾストに行く途中に、実際にこの3つの丘が見える。またボヤントからウルギーへの道中には、大きな蹄の跡が見えるとされる。

### LS4. サグサイ

- ①ウリヤンカイ人はイスワシのヒナを「ツアグツガイ」という。この言葉がなまって「サグサイ」になった可能性がある [ジンスカン氏談]
- ②ススキの穂先を「サグサイフ」と呼ぶことに由来するといわれている [ジンスカン氏談]

### LS5. モドン・フショー 「木の集落」

木製のモニュメント“モドン”ではなく、「モドゥン（冒頓单于）」のことを指したのかもしれないといわれている。

### LS6. ボシュケン・サイ 「ボシュケン（ボツタイ）氏の谷」

「ボツタイ氏の谷」の意。かつてクマがボツタイ氏のラクダを食べたため、同氏がクマと戦って殺したとの逸話が残されている。

### LS7. ブテウ

「かつて大男がこの土地に4つの石を置いた。その石の間は4～5mもあり、今までの頭の部分だけが見えている」との言い伝えが残されている。

### LS8. ジュルクバイ・カバグ（ジャル・エリク）「ジュルクバイ氏の崖」

かつてジュルクバイという男は馬を1,000頭所有していた。タテガミや尾を切るときに「ジュルク」という場所を使っていて、この場所はサグサイ河付近にある（モドン・フショーに行く途中）。同氏の生誕300年周年を記念して、1996年にこの場所でナーダムを行った。このとき、驚使いカイズム氏の所有する馬が2位になった。

#### LS9. アルカルク・ダワー 「アルカルク氏の峠」

かつて銃で撃ってもその弾が体に入らない無敵のアルカルク氏という不死身の男がいた。この男には妻が3人いた。3番目の妻があるとき、「なぜ弾が体にはいらないのか？」と尋ねたところ、アルカルクは「へそだけが弾が防げない弱点なのだ」と漏らしてしまった。じつはこの3番目の妻は敵対者に通じていたスパイだった。この弱点が敵に伝わり、峠でまちぶせされた敵にへそを狙撃されてアルカルクは死んでしまった。この逸話から、アルカルク・ダワー「アルカルク氏の峠」と呼ばれるようになった。

#### LS10. ボルハン・ノール (Бурхан нуур) 「仏像の湖」

バヤン・ウルギー県の中心市から60kmの地点、サグサイ村とボヤント村の境界のゾスト・エレグ（Зост эрэг）という場所にある湖を“ボルハン（Бурхан）”という。この湖の近くに旧サグサイ寺院の跡があった。1970年代から子どもキャンプが作られた小さな居住所である。ゾスト・エレグの仏教寺院は1790年頃に建立され、最盛期にはおよそ300人ラマ僧が常住して読経したり、木版で本と経典を作ったりしていたとされる。しかし、この寺院の僧院長であったTs.トイチョイ氏（Ц.Дойчой）、医師G.ムスライ（Г.Намсрай）氏、ラマ僧Ts.ドブドン氏（Ц.Довдон）たち指導者が、1938年に宗教弾圧で政治犠牲者として捕えられた。このときすべての財産を没収されてしまい、仏像やその他使用していた道具などをこの湖に捨てたのでこの湖をボルハン（仏像）湖と呼ぶようになったとされる。

### 6.3. ウルギー県の地名伝承

バヤン・ウルギー県および本調査地における地名由来・語源を示す民間伝承とオーラルヒストリーは11件が収集された。

#### LU1. ウルギー (Өлгий) 「ゆりかご」

「ウルギー」とは「搖籃／ゆりかご」を示す言葉であるが、その初出は13世紀に編集された『元朝秘史』にまでさかのぼるといわれている。また一説には「ウルギー・サイ」と呼ばれた四方を山に囲まれたゆりかご型の形にも由来するともされている〔シナイ・ラフメット氏談〕

#### LU2. メデン・アラル (“Меден” арал) 「通信の島」

「通信」を意味するモンゴル語「メデー（МЭДЭЭ）」がカザフ語調に転訛したもので、1915年にできた同地の通信設備にも由来するものと指摘される。この島の出身者には、通信エンジニアのマガウヤ・メデン（Магауягийн Меден）氏や、農学者のマリク・メデン（Маликийн Меден）氏などおり、これら人名が地名そのまま用いられたとも考えられる。

#### LU3. アク・バルシク (Ак балшик) 「白い泥」

ウラン・フス村の中心部を示す言葉。同村では1875年に、ロシア人商人のマルコブ（Малков）氏が住み込んで商売をはじめフェルト工場を作り、羊毛製品としてロシアに向けて販売していた。同氏が白いレンガで小さな建物を作りロシア流に石灰で壁を白く塗ったため、地元の人たちはこの場所をアク・バルシク（白い泥）というようになったとされる。

#### LU4. デミク・トルゴイ (“Демик” толгой) 「デミク氏の丘」

ツェンゲル郡のツァガーン・ゴル（Цагаан гол）（1932～1963年まで独立村だった）の

近くにある丘を指す。トゥバ国（Тува）のツァガーン・ソヨン族（Цагаан соён）出身のデミド（Дэмид）氏という裕福な男がそこで冬の間に暮らしていた。同氏は毎年秋に500頭の黄色い仔馬に焼き印を付ける祭りを開き、この行事を地元の人たちも手伝っていた。ヒツジは17もの群れに分けられていたとされる。こうしたことから、この場所は同氏の名を冠して呼ばれることになった。

#### LU5. ポタニニー・ムスン・ゴル（Потанины мөсөн гол）「ポタニン氷河」／

ボタモイン・ダワー（Ботамойын даваа）「小ラクダの首筋峠」

ポタニン氷河の少し上方にある山の尾根を地元の人たちは「ボタ・モイン（Ботамойын）」と呼ぶ。これはカザフ語で仔ラクダを意味する「ボター（Бота）」と、首筋を意味する「モイン（мойын）」を合わせ「小ラクダの首筋」を意味する。ただし、実際には小ラクダの首筋から付けた名前ではなく、ロシアの民族学者グリゴリー・N・ポターニン（Г.Н.Потанин）氏の名前がカザフ語調に転訛したとされる。

#### LU6. ソギス・トウベ（Согыс төбе）「戦争の小丘」

カザフ語で“ソギス（Согыс）”は「戦い」、“トウベ（Төбе）”は「丘」を意味する。バヤン・ウルギー県のアルタイ郡の国境にほど近い、バガ・ダワート（Бага даваат）、シャル・ゴビ（Шар говийн）国境守備兵のキャンプ付近にある。1889年にアルタイ山脈の一帯で暮らすカザフ族のジャディク（Жадик）家とヘレイド族のシェルーシ（Шерууш）家が、この場所で争ったことに由来するとされる。

#### LU7. アピーン・トウベク Апиын Түбек 「薬草の半島」

カザフ語で“アピーン（Апиын）”は「薬草」、“トウベク（Түбек）”は「半島」という意味である。バヤン・ウルギー県のウラン・フス村のイフ・オイゴル（Их Ойгор）山地ふもとのフフ・フテル（Хөх хөтөл）町の付近に位置する。満州国に支配されていた時に、この半島状の土地で中国人たちが薬草を植えていたことに由来するとされる。

#### LU8. ドディガイ・タクタスイ Додыгай тактасы

カザフ語で「ドディガイ氏の机」の意。ドディガイ（Додыгай）氏はナイマン氏族の人物名。西モンゴルをモンゴル国から分離してロシアの管轄下にしようとしたジャ・ラマコとダンビージャンツアン（Жа лам / Дамбийжанцан）氏は、1912年に暴動をおこしてカザフ人たちをハンダガイト（Хандгайт）とトルホログ（Торхлог）へ強制移住させようとした。これに多くの人が反対し、捕えられたカラカス（карахас）氏族の指導者アハムベグ（Ахамбег）氏は生きたままで皮膚を剥かれたとされる。これを見たドディガイ氏は反対暴動を起こし、数日間におよぶ戦いののち、結局銃で撃たれて山に逃げ込んだが客死してしまった。それから1年後、人々によって同地の岩の上で彼の死体が見つかった。そのため、この山を勇気あるドディガイ氏の勇気に敬意を払って同氏の名前で呼ぶようになったとされる。

#### LU9. ハスバータリーン・ハラ・トルゴイ（Хасбаатарын хар толгой）（ハスバータル氏の黒い丘）

ウルギー市から8km、ボゴット村（Бугат сум）の中心から4.5kmのホブド河沿いに位置する。伝承では、「バルチザンのハスバータル氏は太腿を撃たれ、この丘までて小さな小屋を作り自分自身で治療を試みていた。しかし、結局その傷がもとで亡くなった。当時、子どもたちは家から食べ物や飲み物を持ち寄ったとされる」。そのため、この地に同氏の名が冠されるようになったとされる。

## LU10. オラーン・バイシンタ（Улаан байшинт）「赤い建物」

ツアガーン・ノール（Цагааннуур）村から北に20kmのロシアとの国境付近に位置する。モンゴル語で“オラーン・バイシンタ”、カザフ語で“クズル・ウイ（Кызыл Үй）”と呼ばれる。モンゴル語の地名とカザフ語の地名両方で呼ばれる。伝承によると、昔からこの辺には境界哨兵がいた。1921年にツアガーン・ノールのアルタン・トルゴイにはモハル・トルゴイン（Мухар толгойн）軍隊キャンプがあり西の国境線を守っていた。1921年にソ連側に捕まった白軍の軍人たちは、国境近くに幕営用の木造建物を建てた。その建物を赤い土製染料で塗ったことから、この場所は「赤い建物」（オラーン・バイシンタ）と呼ばれるようになったとされる。

## LU11. アルタン・ツォグツ（Алтанцөгц）「金の器」

バヤン・ウルギー県で最初に設立された郡である。県の中心市から東に40kmのホブド河沿いに位置する。同地は当初、アルタン・ツォグツ・ノール（Алтанц өгц нуур）と呼ばれていた。最初は1923年にこの郡はウリアンハイのズテゲルテ公（Зүтгэлт）のホショーに設立された。伝承によると、「大昔ハーンの娘がこの湖で髪の毛を洗っていて使っていた金の器を湖に落としつぶつとした」という故事が由来となり、アルタン・ツォグツという地名になったとされている。

## 7.まとめと今後の課題

本研究では、①在来の古カザフ語地名のドキュメンテーション、②サグサイ郡におけるモンゴル語地名の計量分析、③イヌワシ捕獲地点の在来地名と土地利用観の特定、④地名由来の民間伝承・オーラルヒストリーの収集、の4つのテーマについてフィールドワーク・巡査にもとづき、実証的研究を実施した。

### RT<sub>1</sub>：在来カザフ語地名のドキュメンテーションおよび地図化

在来の古カザフ語地名は、サグサイ南部にその現存が多数確認された。また郡北にはモンゴル語地名が多く、カザフ語地名との併用なども見られなかった。これは地元カザフ人の居住域と歴史的には一致すると考えられる。課題としては、地元生活者への聞き取りでも、ときおり在来地名の示す地理的な範囲・領域・境界が、地形学上の境界区分にもとづき特定できないところがあった。その場合は、稜線、谷底低地、河川などを暫定的な境界として認定した。今後は、現地生活者を同行の上、より正確な範囲の特定を行う必要がある。

### RT<sub>2</sub>：モンゴル語地名語彙の分類および計量分析

今後の課題としては、バヤン・ウルギー県全13郡の地名リスト化を完成させ、全県的な傾向を把握する必要がある。また、記録された地名の分類は今後、地形的特徴、動物相・植物相、気候区分など、同地の自然科学的特徴との対応関係を追及することで、地名由来・命名・語源などの法則性や照應関係が解明されると思われる。

### RT<sub>3</sub>：イヌワシ捕獲地点と土地利用観

現地では、放牧地、資源採集地、狩場、夏牧場・冬牧場など、生活に根差した土地利用観がある。本報告では、イヌワシ捕獲地について報告を行った。イヌワシ捕獲地点はウルギー市西方のアルタイ山地深部が好まれ、とくにウラン・フス北部～サグサイ南部・アルタイ北部にかけて集中する傾向がみられた。逆にウルギー市より東部ではほとんど見られなかった。県南は優れたイヌワシが多数捕獲されるとの認識が鷺使いにはあるが、捕獲地点そのものを特定できなかったため、今後これらのフォローアップ調査も視野に入れる必要がある。

#### RT<sub>4</sub>：地名由来のオーラルヒストリー

地名由来の民間伝承・オーラルヒストリーは、収集できた伝承・逸話を列挙した。これらのドキュメンテーションは、長老・古老の減少により緊急性を要する。サグサイでは、カザフ語およびモンゴル語地名双方の地名伝承等が聞かれた。また一部の伝承については、20世紀に入ってからの比較的新しい時代も含まれている。今後は調査範囲を全県に広げるとともに、歴史的な検証を加える必要がある。

在来カザフ語地名の研究は、少数民族アルタイ系カザフ人にとってのアルタイの土地との結び付きを強化し、ディアスボラ型エスノコミュニティ創世の淵源に歴史的示唆を与える側面がある。この意味で、カザフ語地名の記録は、カザフ人のアルタイに暮らしてきた「誇り」の再構築に資する研究でもある。しかし、モンゴル人とカザフ人の間に横たわる支配／被支配の民族主義的な緊張関係もあることから、カザフ語の地名研究はモンゴルでは公的、また感情的には受け容れがたい一面もある。ただし、本調査により記録した在来地名と作成した地図は、高度に公共性・公益性に資する可能性がある。そのため、今後はWeb公開等を行い、情報の更新とともにアップデートを予定している。英語・モンゴル語・カザフ語での多言語化が進行しており、広く同地域の民族・文化的重層性を敷衍する。

本研究は、単なる「地名研究」を意図しておらず、臨地調査・巡査での地名の記録・収集／それらの分類と計量分析／社会調査をへた土地利用観と地名由来の特定／地理学的・自然科学的特徴と地名の照応関係など、の学際型の「民族地理学」研究である。当該研究は、個別民族・社会・文化に特有の在来地名・地理空間・土地利用観を、固有の知的資源・在来知・伝統知として再定義する学術的貢献を意図している。今後もこうした地名文化の記録・保存を能動的に世界各地で推進することに、民族地理学の担うべき使命があると思われる。

#### 参考文献

- 相馬拓也 2014. モンゴル西部バヤン・ウルギー県サグサイ村における移動牧畜の現状と課題, E-Journal GEO vol. 9 (no. 1): pp. 102-119.
- 相馬拓也 2015a. モンゴル西部アルタイ系カザフ騎馬鷹狩文化の存続をめぐる脆弱性とレジリエンス, E-Journal GEO 10 (1): pp. 99-114.
- 相馬拓也 2015b. モンゴル西部バヤン・ウルギー県におけるヤギと牧畜民の新たな関係:「ヤギ飼い」のライフヒストリーから探るアルタイ系カザフ社会の地域開発, ヒトと動物の関係学会誌 (41): pp. 47-57.
- 相馬拓也 2016a. カザフ騎馬鷹狩文化のイスワシ捕獲術と産地返還にみる環境共生観の民族誌, E-Journal GEO 11 (1): pp. 119-134.
- 相馬拓也 2016b. 北アジアの遊牧文明をさえた伝統知(TEK)の再構築と継承性の民族考古学, 『高梨学術奨励基金年報 平成27年度研究成果概要報告』: pp. 360-367, 東京: 財高梨学術奨励基金.
- 相馬拓也 2017. 北アジアの遊牧文明をさえた伝統知と環境共生レジリエンスの学際研究, 『高梨学術奨励基金年報 平成28年度研究成果概要報告』: pp. 344-351, 東京: 財高梨学術奨励基金.
- 相馬拓也 2018.『驚使い（イーグルハンター）の民族誌: モンゴル西部アルタイ山脈に息づくカザフ騎馬鷹狩文化の民族鳥類学』, 京都, ナカニシヤ出版.
- Barcus, H. and Cynthia, W. 2010. The Kazakhs of Western Mongolia: Transnational migration from 1990-2008. Asian Ethnicity 11 (2): 209-228.
- Diener, A. C. 2010. One homeland or two?: The nationalization and transnationalization of Mongolia's Kazakhs. Woodrow Wilson Center Press: 162.

National Statistical Office of Mongolia (NSO) 2009. Монгол улсын статистикийн эмхэтгэл (Mongolian statistical yearbook), Ulaanbaatar, NSO.

National Statistical Office of Mongolia (NSO). 2012. Resident population, by aimags and the Capital 2003-2010 year.

[http://www.nso.mn/v3/index2.php?page=free\\_access](http://www.nso.mn/v3/index2.php?page=free_access) (Last accessed 9th Nov. 2012)

Э. Равдан. 2004. “Монгол газар нутгийн нэрийн зүйлчилсэн толь” (1970-1980 он, 5 боть, 8 дэвтэр)  
Улаанбаатар (拙訳：E. ラブダン. 2004.『モンゴル地名分類大辞典』, ウランバートル).